

## 61 国際保健への応用を勘案した日本の乳児死亡の医学史的研究

○岡村恭子・村山伸子・長谷川敏彦

〔目的〕 その国の健康状態を示すのに最もよく使われる指標である乳児死亡率は、日本が一九二〇年代には先進国間でも最も高かったにも関わらず、一九八四年以降世界最低の水準を示すに至っている。多くの発展途上国では、日本の実績を勘案し、その歴史から学びたいとの機運が高まっている。そこで、歴史的転換点となった一九二〇年頃の乳児死亡に影響を与える諸要因を歴史的に分析することにより、国際保健における母子保健の諸政策に資する分析を試みた。

### 〔方法〕

#### 1. 人口動態、諸指標の分析

帝国人口動態統計等、政府統計より、粗死亡率、粗出生率、乳児死亡率、五歳以下死亡率、新生児死亡率を抽

出し、時系列で分析をした。

#### 2. 教育の影響の歴史的分析

文部省教育調査より、一八七三年から一九四三年までの男女別の小学校の就学率を時系列で分析した。一九〇〇年から一九四〇年に至る出生児のうち、母親が小学校に就学していた割合を、一歳階級別の人口数に小学校就学率を掛け合わせ、更に各年の出産児の母の年齢を一九二五年のパターンと同一とし、且つ小学校就学並びに不就学の条件で死亡率が増えないことを想定して算定した。

#### 3. 乳児死亡率とその決定要因の多変量解析

一九三〇年と一九四〇年の二点で、五歳以下死亡や乳児死亡率と教育、経済、医療の三要因の相関を分析した。沖繩を除く四六都道府県の県民一人当たり所得、小学校就学率、医療要因として人口対医師数をとり、ステップワイズの多変量解析を行った。

### 〔結果〕

#### 1. 小児死亡、母子保健関連指標の歴史、時系列分析

粗死亡率、粗出生率は、一九二〇年頃をピークに低下

している。新生児死亡率は一九〇〇年以降、世界的に低下の傾向にあり、特に二〇年にピークは認めない。乳児死亡率は戦後急激に低下し、一九七〇年以降、低下の速度は鈍っている。

## 2. 母親識字率の変化

二〇歳から三五歳までの出産数の多い、且つ社会的な活動の高いと考えられる若年女性の識字率を見ると、一九〇〇年頃には極めて低かったものが、一九二〇年に急増し、三〇年代、四〇年代には一〇〇パーセントに近づいている。母が小学校就学歴を持つ出生児の割合も極めて同様の傾向を示し、一九三〇年代にはほぼ一〇〇パーセントに近づいている。

## 3. 多変量解析の結果

一九三〇年には乳児死亡率で教育との相関が認められたが、一九四〇年には五歳未満死亡で教育の影響、乳児死亡率で経済の影響が認められた。

〔考察〕 これらを総合的に考察すると、日本の乳幼児死亡率は一九二〇年代以降低下に転じ、その原因はこれまで語られてきた一九二〇年の社会的背景、例えば女性

解放運動、食糧難への対応、母親への衛生教育以外に、それらを支えた女性への教育の向上が想定される。

高い乳児死亡率に影響する要因としては、直接死亡につながる疾病等の近因と、社会経済的要因等の遠因が考えられる。特に高い水準の場合には、教育、次いで経済的要因等の遠因が大きく影響していることが判明した。日本の歴史過程の分析から、経済開発と平行して、教育等の社会開発に資源を投入することの必要性が示唆された。

〔結論〕 世界最低の乳幼児死亡率を示すに至った日本の歴史的過程の分析は、日本が国際社会に貢献するためにも必須の責務と言える。今回の医学史的研究によって、乳幼児死亡等の健康の結果が保健医療セクター以外の諸要因に影響されていることが明らかとなった。それらの要因の中で教育等の社会開発の重要性が示され、日本の明治政府の政策の有効性が示唆された。

(国立医療・病院管理研究所)